

# ベートーヴェン 「第9」演奏会

2023年12月22日（金） NHKホール

バーバー／弦楽のためのアダージョ

ベートーヴェン／交響曲 第9番 二短調 作品125「合唱つき」

指揮：下野竜也

ソプラノ：中村恵理 メゾ・ソプラノ：脇園彩 テノール：村上公太 バス：河野鉄平

合唱：新国立劇場合唱団

## N響 ベートーヴェン「第9」演奏会レビュー

- 投稿日 2023年12月27日 ぶらあぼ

2023年も残すところあと数日。混迷を極める世界情勢のなか、「第9」の力強い音楽と言葉がわれわれに訴えかけるメッセージも、今年はひとときわ胸に迫るものがあります。12月22日、NHKホールで行われた下野竜也（指揮）NHK交響楽団の演奏会の模様を速報でお届けします！



最初に、バーバーの「弦楽のためのアダージョ」が演奏された。この作品のオリジナルは彼の弦楽四重奏曲の第 2 楽章であるが、作曲者によって 1938 年に弦楽合奏用に編曲され、オーケストラ曲として単独でしばしば演奏されている。

バーバーの「弦楽のためのアダージョ」は、本来、追悼を意図して書かれたものではないが、アメリカのケネディ大統領の葬儀で奏でられたように、その静かで祈りのような音楽がしばしば葬送の音楽として奏でられてきた。1 年の締め括りの「第 9」演奏会の冒頭において、下野がこの作品を取り上げた意図ははっきりとはわからないが、聴き手としては、ウクライナやパレスチナで多くの犠牲者が出た 2023 年の最後にそれらの人々に思いを寄せないではいられなかった。

演奏は、第 1 ヴァイオリン 16 名のフル編成の弦楽オーケストラ。下野は感情過多になることなく、むしろ淡々と音楽を進めていく。しかし、いつの間にかその頂点で悲痛な叫びに至る。そのあと再び静かな調べ。

そして休憩を置かず、合唱団（新国立劇場合唱団）と独唱者（ソプラノ：中村恵理、メゾ・ソプラノ：脇園彩、テノール：村上公太、バス：河野鉄平）が入場して、「第 9」の演奏となった。



下野竜也

下野の指揮は、第 1 楽章冒頭から推進力があり、滞ることなく前へと進む。オーケストラの音引き締まっている。第 2 楽章も良いテンポ。オーボエの吉村結実（吉は土に口）が見事なソロを披露。第 3 楽章では、ヴァイオリンの旋律を支えるヴィオラやチェロの音がよく聴こえ、音楽に深みや厚みを感じる。そして、ヴァイオリンの、決して大振りではない、弱音でのカンタービレが心にしみる。繊細でハッとするような弱音が美しい。つまり、下野は、オーケストラに歌を強いることなく、内側から歌を引き出していた。ホルンのソロ（庄司雄大）も見事に決まる。

そして第4楽章。「おお友よ」と呼びかける、河野鉄平の第一声のレチタティーヴォは朗々と歌われる。そのあとの、チェロとコントラバスによる歓喜の主題の提示は、過度に緊張を強いることなく、コントラバスが大きめの音量でしっかりと喜ばしく歌い始められる。そして、新国立劇場合唱団が歌う歓喜の主題はとても力強い。独唱では、ヨーロッパの一流歌劇場で歌う中村恵理とイタリアでの活躍が著しい脇園彩がまさに国際級の歌唱を聴かせてくれた。

終盤の二重フーガ(全曲中の最大の難所ともいえる)は、快速でとばす演奏も多いが、下野はじっくりと力強く描こうとする。それに応える新国立劇場合唱団。最後のマエストーソは、伝統的にはゆっくりと壮大に描かれるが、下野は楽譜のテンポに近い、速めの演奏。そこで、本来の楽譜にはない(楽譜上では独唱者たちは最後の四重唱で出番は終わり、そのあとは歌わない)独唱者たちも合唱に加わり、まさに全員の歌声で締め括られた。私はこの最後の合唱に独唱者たちが加わる演出に大賛成である。



ソリスト 左より) 中村恵理、脇園彩、村上公太、河野鉄平

下野によって隅から隅まで非常によく考えられた「第九」。そしてそれに献身的に応える N響。とても聴き応えがあり、充実感のある「第九」であった。(写真提供: NHK 交響楽団)



## 【下野 竜也 指揮 NHK交響楽団】

NHK交響楽団の指揮は今年10月、同団正指揮者に就任したばかりの下野竜也。就任後初の共演であり、第9公演でも初顔合わせとなった。

最初にバーバーの弦楽のためのアダージョが演奏され、そのまま休憩を挟まずに第9が演奏された。弦楽のためのアダージョは米国のケネディ元大統領の葬儀で使われたことで知られるが、今でも鎮魂や追悼のシーンで演奏されることが多い。今年は昨年から続く、ロシアによるウクライナへの侵略戦争に加えて、パレスチナ紛争の激化で多くの人が戦火に倒れた年となった。人類愛を高らかに歌い上げた第9に先立ってこの曲が演奏されたことに、こうした悲劇に思いを馳(は)せた聴衆は筆者だけではないだろう。タイムリーで強いメッセージ性のある選曲であった。

さて、第9であるが弦楽器は16型のフル編成で、木管各パートに1人ずつアシスタント奏者(アシ)を配して演奏が行われた。ピリオドなど最新の奏法も適度に取り入れつつ、20世紀以来の伝統的なスタイルの利点もほどよく生かしたバランス型のアプローチ。といっても中庸な解釈ではなく、特定の音符やフレーズを強調するような音作りが印象的で、下野の研究と実践の積み重ねの成果を感じさせる出来ばえであった。全体としてはN響の重厚なサウンドと相まって、多くの聴衆が受け入れやすい端正な演奏に仕上がっていた。

取材日:12月22日(金) NHKホール 宮嶋 極 みやじま・きわみ